箱根駅伝出場校における選手満足度とパフォーマンスとの関係

スポーツマネジメントゼミナール　1213075　小林　千紘

１．研究動機・研究目的

スポーツとしてだけではなく、近年の日本で大きなビジネスともなっている箱根駅伝に出場する大学では、選手がプロのような扱いをされている例は少なくなく、競技力が高い学生ほど、学費免除や金銭的援助など、多岐にわたり手厚い支援を受けている。箱根駅伝に出場する大学の選手は一般の大学生と比べると全く別格な扱い方をされている。

そこで、箱根駅伝出場校の選手の満足度の構造を明らかにすることで、今後の大学競技選手を取り巻く制度や支援、環境整備などの在り方を検討することが出来ると考えられる。また、日本とアメリカの双方の学生スポーツをとりまく制度や環境を理解したうえで、アメリカで開発された ASQ の質問項目で課題のあった項目を精査することで、日本版の ASQ にとってより高い信頼性を得られることができると考え、本研究に着手した。

本研究の目的は、箱根駅伝出場大学の全体的な選手満足度、箱根駅伝メンバーの満足度と目標達成の可否に着目し、１）箱根駅伝出場大学の全体選手満足度、各分野別の選手満足度を明らかにすること、２）パフォーマンス(競技結果)、選手満足度、高校時代の満足度との関係を明らかにすることである。また、一般大学生と箱根駅伝出場校の選手との ASQ の差異を明らかにすることを目的とした。

２．研究方法

調査対象は、第 92 回(2016 年)箱根駅伝出場全 20 校の箱根駅伝メンバー、箱根駅伝補欠、関東インカレ･全日本インカレの選手としたが、有効な回答が返ってきた大学は６校の選手全 55 名だった。また、本研究では質問紙調査を行った。本研究の趣旨を各大学の陸上競技部･駅伝部の代表者(マネージャー)に説明し了承をとった後、了承のとれた大学に質問紙を郵送し、質問紙に回答してもらい返信封筒にて郵送してもらい、回収した。

調査委内容はとして、１）個人属性、２）全体満足度、３）パフォーマンス(競技結果)、４）高校時代の満足度、５）ASQ（15 因子 56 項目)の 5 つの項目を回答してもらった。個人属性については、学年、競技レベル、昨シーズンの最高成績を回答してもらった。

３．主な結果と考察

今回の研究では、満足度に関する 15 因子 56 項目の質問の信頼性を検討するため、SPSS12.0 を用いて因子ごとに信頼性係数（クロンバックのα値）を算出した。15 因子中、11 因子が信頼性係数α＝0.70 を上回る結果となった。そのため、本研究に際し、妥当性は問題ないと判断した。

ASQの15因子におけるシード権獲得校と非獲得校の平均値、F値、有意確率を算出したところ、本調査の対象者のほとんどで統計的に有意な差が認められなかった（Wilk’s Lamda＝0.51, F＝1.974, p＜.001)。

15因子の「金銭」以外の因子で有意な差があることが認められなかった。

４．結論

全体満足度は「個人目標の達成度」、「チーム目標に対する達成度」、「昨シーズン全体の満足度」が平均値3.00を越えなかったが、「チーム目標に対する大学陸上部のサポート」、「駅伝チーム全体の満足度」に関しては平均値がそれぞれ4.05､3.69と比較的高い値を示した。そこから、個人･チーム目標の達成度合いについては満足を示さなかったが、大学陸上部からのサポートや所属している駅伝チームそのものに対しては高い満足を示した。また、シード権を獲得した大学と獲得できなかった大学では、「個人にパフォーマンス」と「チームのパフォーマンス」の満足度に関しては大きな差はないと判断した。

得たデータを箱根駅伝でシード権獲得群と、非シード権獲得群に分け、一元分散分析にかけた。そして、ASQの15因子における平均値、標準偏差、F値、有意確率を算出した結果、ほとんどの因子で有意な差は見られなかった。唯一有意な差が見られた因子は「金銭」のみだった。「箱根駅伝においてシード権を獲得している大学は、満足度も高い。」と仮説を立てたが、シード権を獲得した大学と、シード権を獲得できなかった大学の満足度に有意な差は見られなかった。

得られたデータを箱根駅伝でシード権獲得群と、非シード権獲得群に分け、一元分散分析にかけた。そして、ASQの15因子における平均値、標準偏差、F値、有意確率を算出した結果、ほとんどの因子で有意な差は見られなかった。唯一有意な差が見られた因子は「金銭」のみだった。「箱根駅伝においてシード権を獲得している大学は、満足度も高い。」と仮説を立てたが、シード権を獲得した大学と、シード権を獲得できなかった大学の満足度に有意な差は見られなかった。

５．卒業論文の執筆を終えて

自身が駅伝部に所属しているということもあり、論文も箱根駅伝について執筆した。対象を第92回の箱根駅伝に出場した大学としたが、協力をしてもらえない大学も数校あり、データとしては数が少なかったように思える。そんな中でも依頼に協力をしてくれた大学には大変感謝している。20,000字という壁が果てしなく高く見えたこともあったが、論文を書き終えてみると、とても清々しい気分だった。

この二年間、小笠原先生のもとで厳しい指導を受けながら、自身を成長させることができた。スポーツマネジメントについて改めて基礎から接し、アメリカで使用されている英文の教科書にも悩まされたが、振り返ってみると、とても糧となっていると感じた。ゼミナールで学んだこと、成長したところを社会でもフルで活用していきたい。